

自己評価能力の育成を目指した音楽科における OPP シートの活用 —OPPA 論を手がかりに—

奥原 実紅

教科研究開発高度化系 教科学習探究コース

芸術探究プログラム

序章 研究の目的と方法

第 1 節 問題の所在

平成 29 年 3 月に告示された学習指導要領では、育成を目指す資質・能力が 3 つの柱に整理され、社会に開かれた教育課程の実現を目指すことが示された。学校教育においては「令和の日本型学校教育」の構築を目指し、個別最適な学びや協働的な学びなどを中心に、子どもたちの学び方を精査しながら資質・能力の育成に日々励んでいる。

一方で、筆者は音楽科授業における振り返り活動に問題意識を持っており、特に子どもたち自身が自らの学びを見取る力が低いことに対して懸念を抱いていた。1 時間の授業の最後には、音楽科に限らず様々な教科において振り返り活動を行うが、音楽科においては、ワークシートの最後の欄に「今日の授業の感想を書きましょう」「今日の授業で気づいたことや考えたことをまとめましょう」というように、大まかな記述内容を指定しつつも、子どもの自主性に委ねた振り返り欄が多い。その結果、子供たちは「何を書けばよいのだろう…」と悩んだり、板書内容を書き写したりすることで、授業の振り返りを曖昧に乗り越えているのである。

これらの問題を解決するための方法として、授業時数が少ない音楽科の学習における自己の学びや成長を実感させることで、学習内容の定着や学習意欲の向上などに結び付くことを期待し、授業内における学習活動の中で自己の学習内容を振り返り自分自身の学びを見取る「自己評価」の力を育むことを目指したいと思い至った。さらに、自己評価を授業内の学習活動として位置付けるために評価理論の 1 つである OPPA 論に着目し、研究授業を基に考察したいと考えた。

第 2 節 研究の目的と方法

本研究の目的は、自己評価能力の育成を目指し、中学校音楽科授業において、OPP シートを活用することで生徒がどのように変容したのか、また授業における OPP シートの機能について明らかにすることとする。OPP シートとは、OPPA 論で使用される単元全体の学習をまとめる 1 枚の用紙のことである。また、本研究の方法は次の通りとする。

- (1) 学校教育における自己評価能力の位置付けを示す。
- (2) OPPA の定義を規定し、先行事例を検討する。
- (3) 中学校音楽科の授業実践に向けた OPP シートを開発する。

(4) 授業実践の概要を示し、OPP シートの分析結果と考察を示す。

第 3 節 先行研究の検討

音楽科授業における OPPA 論の活用を検討した研究には、川村有美の研究がある¹。川村は音楽授業における OPPA の教育的意義として、生活知に根差した学びの有用性を追究する際の具体的な学習活動と指導過程を一体化した学習者と教師の双方向性を担保した具体的な方法論であることを、さらに単なる方法論としてではなく、構成主義に立脚した学習観・指導観であることを示した上で、体系知だけでなく、学習の論理的思考力、実践する力、協働する力、自己評価力等のような方法知や現実知の力を適切に見取ることによって、音楽科でこれから一層求められる資質・能力の育成にも意義深いと考察した。

この研究においては、音楽授業における OPPA の教育的意義について明らかにしているものの、川村自身は OPPA を活用した授業実践は行っておらず、理論的背景からの考察や授業構想に留まっている。また、OPPA 論を手がかりとした授業実践事例は数多く存在するものの、筆者が調査した限りでは、自己評価能力の育成を目的とした研究に該当するものはなかった。

以上のことより、本研究は自己評価能力の育成を目的とし、OPPA 論を活用した音楽科授業の実施・分析といった点において先行研究とは異なる独自性を持つと言える。

第 1 章 学校教育における自己評価能力の育成

第 1 節 学校教育における自己評価の定義

本節では、自己評価に関わる用語について、辞典や教育評価に関する事典、自己評価に関する書籍や論文を手がかりに整理し、本研究における定義を規定する。また、現在の学校教育における自己評価の位置付けについて検討する。

第 1 項 自己評価に関する用語の定義

本研究では、西岡・石井（2021）や橋本（2019）に記載されていた「自己評価」「メタ認知」についての定義を踏まえた上で、自己評価を「自らの学習を振り返り、振り返りから得た情報に基づき、学習の成果を主とした自分自身の学習状況を把握すること」と規定し、また自己評価との関連が深いメタ認知を「自己の考えやその変容を客観的に捉え、把握すること。また、自己を客観的な視点から確認するといったモニタリングという行為は自己評価活動の中核となる」と規定する。そして、これらの定義より、自己評価能力を「自己の考えやその変容を客観的に捉え把握するといったメタ認知を働かせながら、自らの学習を振り返り、振り返りから得た情報に基づき、学習の成果を主とした自分自身の学習状況を把握する能力」と規定する。

第 2 項 学校教育における自己評価の位置づけ

自己評価に関わる能力の育成について検討したところ「21 世紀型能力」に辿り着いた。21 世紀型スキルとは、アメリカにおいて実社会や職場で必要とされる今日的な資質・能力を定義する大規模な試みが始められ、様々な専門団体や個人によって今日的なコンピテンシーを定義する試みの中で使用されるようになった概念である²。この 21 世紀型スキルの概念を基に、日

本の国立教育政策研究所がこれまで日本の学校教育が培ってきた資質・能力を踏まえた上で「基礎」「思考」「実践」の観点から再構成した日本型資質・能力の枠組みが「21世紀型能力」である³（図1）。

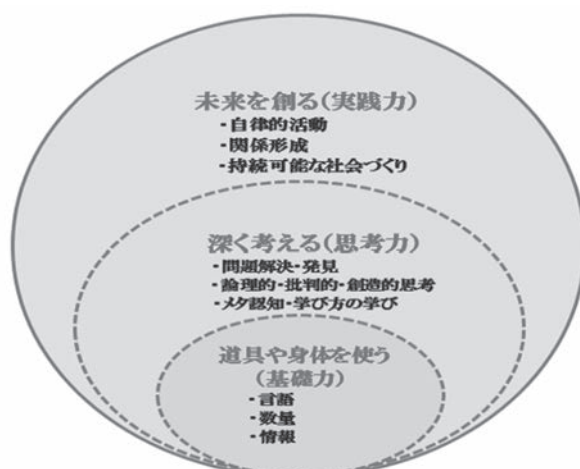


図1：21世紀に求められる資質・能力の構造一例

思考力におけるメタ認知の働きについて、国立教育政策研究所の研究報告書においては「子供は、自分なりの『どうしたら学ぶことができるか』『ものを覚えられるか』といった『学習観』や『記憶観』を持っています。小学校高学年ともなれば『学ぶには反復が大事』『覚えるためには何度も書く』などそれなりの考え方を述べます。このメタ認知を出発点としながら、人の実際の学び方に根差した教育の在り方へと作り変えていくことが、質の高い学び方の学びにつながります。」⁴と示されている。

以上より、自分なりの学習観や記憶観はメタ認知の働きによって得るものであり、自己評価能力を伸ばすことで、21世紀に求められる資質・能力の育成に結び付くことが明らかとなった。

第2節 学校教育における自己評価能力育成の意義

本節では、学校教育における自己評価能力育成の意義や効果について調査し、検討する。

第1項 学習評価における自己評価の位置づけ

中島（2019）によると、学習評価の機能は、成績認定や進級、進学などのための判定が該当する「学習の評価」、教師の教育活動に関する意思決定のための情報収集、それに基づく指導改善が該当する「学習のための評価」、そして自己の学習のモニタリング、および自己修正や自己調整が該当する「学習としての評価」の3つに分けられている⁵。自己評価は、自己の学習のモニタリング、および自己修正や自己調整に分類されるため「学習としての評価」に該当する。評価活動を学習活動として捉えた「学習としての評価」は、これまで評価活動の主体が教師だったものを学習者に転換していくことで、学習の場として評価活動を位置づけ、子供たちを主体的に参加させていくことができるため、形成的評価論や「学習のための評価」を新たに発展させるものとして注目を集めている⁶。

第2項 学校教育における自己評価能力育成の意義と効果

学校教育で自己評価能力を育成する意義として「学習意欲の向上」と「自己調整学習への展開」の2点が挙げられる。

平成29年告示の学習指導要領総則編においては「教師による評価とともに、生徒による学習活動としての相互評価や自己評価などを工夫することも大切である。相互評価や自己評価は、生徒自身の学習意欲の向上にもつながることから重視する必要がある。」⁷と明記されている。また、千田（2018）は『学習意欲』を高めるために、育てていきたいものとは『自己評価力』であると考えている。」とした上で、授業実践の効果として『良好な関係の構築』や『振り返りシート』等の活用により、『意欲的に』授業に参加する生徒が増えてきた。」と述べている⁸。このことから、学習活動としての自己評価を授業で取り入れるなどを通して自己評価能力を高めることにより、生徒の学習意欲の向上が期待できる。

さらに、自己評価活動を通して自己の学習を振り返り、学習状況を把握することは「自らの学習をモニタリングする等の『認知』領域、課題に対する自身の興味・関心などの『動機づけ』の領域、学習計画の立案や疑問点の質問といった『行動』の領域」⁹などが提唱されている自己調整や自己調整学習といった概念との関わりが深い。self-reflectionモデルを開発した木村・黒上（2022）は、self-reflectionモデルに「振り返るプロセス」を設定し、そのサブプロセスとして設定された「評価する活動」においては自己評価スキルの発揮が組み込まれていた¹⁰。つまり、自己評価能力は自己調整学習における分析・改善の前段階にある振り返り活動を充実させるために必要な力であり、自己評価能力を高めることにより、自己調整学習への円滑な接続や「自ら学ぶ力」の育成に繋がると推察できる。

第3節 学校教育における自己評価能力育成の課題

自己評価に関する研究や実践は多く行われている一方で、学校教育における自己評価能力育成の課題は多く残されている。

学校教育における自己評価能力育成の課題については「学習活動としての役割を果たしていないこと」と「学習活動の具体的内容の把握ができていないこと」の2点が挙げられる。

小学校高学年における英語科の授業実践を行った田山（2020）は「自己評価は学習者が主体的に取り組むことができる活動である一方で、主観的であり、情意面での感想に終始してしまう面も持ち合わせている。」¹¹と述べており、現在の自己評価は「学習としての評価」としての役割を果たしていないと考えられる。

また、遠藤（2021）は従来の自己評価の問題点について「これまで多くやられてきた自己評価の形式に次のようなものがあります。『今日の授業はどうでしたか？』と尋ねて、『よくできた』『おもしろかった』『がんばった』などと答えさせるものです。こうした自己評価は、教師がその日の授業の印象を知る材料にはなるかもしれませんが、しかし、ただ漠然と感想を書くだけの評価では、次にどう改善していったらいいかというフィードバック情報を得ることが、子どもにも教師にもできません。（中略）改善の指針を得るために、自分の学習活動の実態を具体

的に把握することが自己評価には必要です。」¹²と述べており、授業の感想はあくまでも感想であり、自己評価には学習活動の実態を具体的に把握することが必要だと主張している。

これらの課題を解決するために、次章では評価論の1つである「OPPA 論」について調査・分析し、授業実践に向けた手がかりを得る。

第2章 自己評価能力育成を目指した OPPA 論とその実践

第1節 自己評価能力を育成する OPPA 論

OPPA 論に着目した理由として、評価理論として確立されており、なおかつ授業実践に取り入れることで自己評価能力の育成に有効的だと考えたことが挙げられる。では、OPPA 論とは具体的にどのような理論なのだろうか。

本節では、堀哲夫氏が提唱した OPPA 論について定義を規定し、OPPA 論の概要を整理する。

第1項 OPPA 論の理論的背景

堀（2019）によると、OPPA は「構成主義の考え方をもとにした学習論、授業論」¹³であり、その構成主義を「私たちの知り得ることは、本質的に一人ひとりの認識が生み出したものに他ならないので、自分の経験や思考から個人に固有の知識や考え方などを創り上げるといった考え方」¹⁴であるとし、構成主義の中でも社会的構成主義との関係性を主張している。つまり、これまで学習者が獲得してきた知識や考え方が学習活動や他者との関わりの中で学習者自身が変容していくといった OPPA 論の学習は社会的構成主義の理論に依拠していると解釈できる。

第2項 OPPA の定義と概要

OPPA とは「教師のねらいとする授業の成果を、学習者が1枚の用紙の中に学習前・中・後の履歴として記録し、その全体を学習者自身が自己評価する方法」¹⁵である。OPPA は「One Page Portfolio Assessment」の略称であり、日本語では「一枚ポートフォリオ評価」と表現される。OPPA では「学習や授業の進展とともに、学習者の既存の知識や考え方が変容し、それを学習履歴として OPP シートに記録、その内容を教師が確認し授業の中で適切な指導を行っていくとともに、学習者が自己の学習状況をモニタリングし自己評価を行う」¹⁶といった流れを辿る。図2は、OPPA における学習者と教師の基本的関係を図で表したものである。

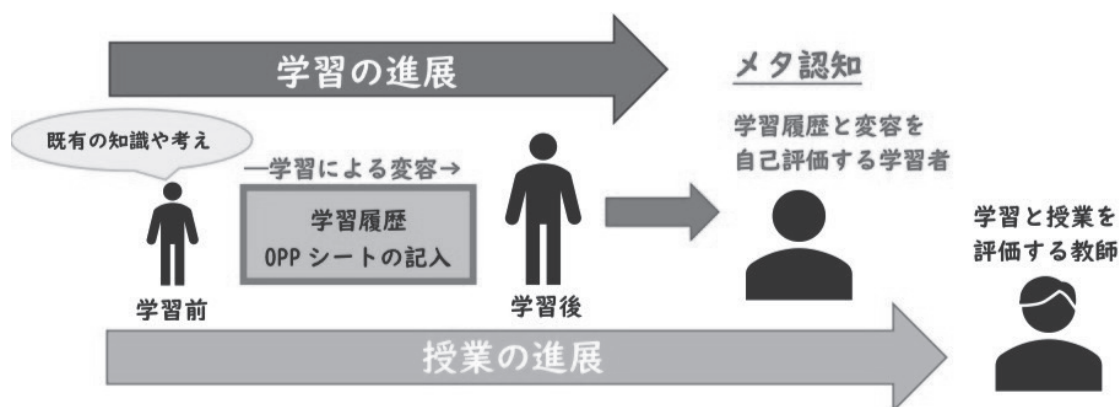


図2：OPPA における学習者と教師の基本的関係（堀 2019 を参考に筆者作成）

第 3 項 OPPA と OPP シート

OPPA で使用する OPP シートは、教師が授業設計の段階で作成し、学習者が毎時間の授業後に記入した内容を教師が確認するとともに適切なコメントなどを与え、学習の改善を図るといったサイクルを繰り返し、単元終了後に学習内容全体を学習者に自己評価させるといった一連の流れで活用する 1 枚の用紙のことである¹⁷。この OPP シートは「単元タイトル」の他に、学習前後に全く同じ問いを設定することが特徴の「本質的な問い」、毎回の授業で今日の授業で 1 番大切だと思ったことを記録する「学習履歴欄」、そして学習者自身の変容を自覚させることができる「学習後の自己評価欄」といった項目が設定されている。これらの項目には、OPPA を成立させるための重要な役割があり、教師は学習者に対して明確な学習目標を提示しつつ、本質的な問いの設定により単元の本質に迫ることができる授業構想を行う必要がある。

第 4 項 OPPA 論と自己評価能力の関係

OPPA は学習者にとっても様々な意義を持つが、自己評価能力育成の観点からみると「学習者の思考や認知過程の内化・内省・外化の重視」「自己評価を活用したメタ認知能力の育成」という 2 つの意義が見出される。

OPPA で用いられる OPP シートには、学習者自身が学習成果を外化することにより、学習者及び教師が学習内容を客観的に把握することができ、なおかつ教師からのフィードバックにより学習者が内化・内省し、自己の学びを常に振り返りながら学習目標の達成に向かうことができる機能がある。さらに、「学習全体を通した自己評価」のみならず、「本質的な問いに対する自己評価」や「学習履歴に対する自己評価」など、複数の自己評価が内在していることから、学習者は様々な視点からメタ認知を働かせて自己の学習を振り返っており、これらを繰り返していくことで、自己評価の一部であるメタ認知の力が向上すると考えられる。

第 2 節 OPPA を活用した先行事例の検討

ここまで OPPA や OPP シート、そして自己評価能力について検討してきた結果、OPP シートを活用することが自己評価能力を育成するための手立てとなり得ることが明らかとなった。

このことを踏まえ、本節では先行事例を参照し、OPPA 論の活用について分析し検討する。

第 1 項 分析の対象と視点

分析対象とする OPPA 論を活用した先行事例は、全校種と全教科とする。また、先行事例の分析視点として OPP シートの各項目を設定するために、実際に使用した OPP シートが資料として掲載されているものに限定する。また、分析視点は「OPPA 論を活用する目的」と「OPP シートの構成要素の特徴」の 2 つである。

第 2 項 OPPA を活用した先行事例の概要

本研究では、論文検索サイト「CiNii」を中心に調査し、大学紀要論文等に掲載されていた 5 つの先行事例を取り上げた。次頁表 1 は先行事例リストである。

表 1：先行事例リスト

事例番号	出典	年号
1	菅野標・坂本紀子「小学校体育科保健領域における OPP シートの作成—小学校での実践を手がかりとして—」『北海道教育大学紀要（教育科学編）』第 68 巻、第 1 号、63-76 頁。	2017 年
2	萩野奈幹「道徳科における長期的評価の在り方—OPP シートを蓄積したポートフォリオ評価での検討会の試み—」『道徳と教育』第 337 巻、3-14 頁。	2019 年
3	蒔苗靖子「日本美術鑑賞学習における『深い問い』に関する—考察—尾形光琳〈紅白梅図屏風〉の授業実践を中心に—」『弘前大学教育学部研究紀要』第 26 巻、79-90 頁。	2022 年
4	谷口聡子・中島雅子「自己評価を重視した『主体的に学習に取り組む態度の育成』に関する研究—OPPA を活用した高校英語授業を事例として—」『埼玉大学紀要』第 71 巻、第 1 号、109-119 頁。	2022 年
5	江口佐智子「課題解決能力の育成を目指す自己評価活動を取り入れた家庭科学習の考察—『理解の 6 側面』に着目して—」『佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要』第 6 巻、219-232 頁。	2022 年

また、5つの先行事例の授業の概要として、校種・学年・教科と単元名・題材名、研究の目的を以下の表 2 に示す。

表 2：先行事例の概要

事例番号	校種・学年・教科	単元名・題材名	研究の目的
1	小学校 3 年・保健	毎日の生活と健康	保護者と学習内容を共有できるスペースを取り入れ、さらに、クラスの「他の児童からの評価」欄を設けたシートを作成すること。また、用紙や枠の大きさ・質問の表現のしかたなど保健学習を行う上でよりよい OPP シートを作成すること。
2	小学校 3 年・道徳	3 年生 道徳ワークシート	道徳科における長期的評価の在り方について検討すること。
3	中学校 2 年・美術	※生徒自身が題材名をつける	造形的な思考を動かすための「深い問い」によって、生徒の日本美術に対する考え方がどのように変化したのか、「深い問い」とはどのような問いなのか明らかにすること。
4	高校 3 年・英語	幸せになるための学習履歴表	OPPA を活用した「主体的に学習に取り組む態度」の育成について、評価の機能に注目し、その効果を明らかにすること。 OPPA の「学習としての評価」機能を検証すること。
5	小学校 6 年・家庭	健康な生活のための朝食デザイン おいしいため物を作ろう	児童の課題解決能力を育むための「自己評価活動」を取り入れた家庭科学習を考察すること。

第3項 OPP シートの検討

各先行事例における OPP シートの項目を比較すると、単元タイトルの有無には違いがあったものの、全ての先行事例において「学習前・後の本質的な問い」「学習履歴」「自己評価」の項目が設定されていた。以上のことから、音楽科授業における OPP シートの開発に向けて、この3項目をより詳細に比較・分析することとした。

第4項 考察

先行事例を検討した結果、幅広い教科・校種で授業実践が行われていることから OPP シートの汎用性の高さが明らかとなった。また、先行事例の授業における OPP シートの各項目の特徴を次の表3に整理した。

表3：先行事例の OPP シートにおける各項目の特徴

	特徴
学習前・後の本質的な問い	【内容】「トピックごとの本質的な問い」と「包括的な本質的な問い」の2つに区別され、OPPAにおいては「トピックごとの問い」を使用することが多い。 【設定】学習前・後の問いは全く同じ内容を設定することが求められるが、学習における学習者の変容を想定し、文章表現を変化させる場合がある。
学習履歴欄	授業の振り返りの目的や内容を焦点化している。 複数の項目を設けることで、学習者の学習履歴をより詳細に残すこともできる。
学習全体を通した自己評価	自己評価の対象は「学習内容」と「自己の変容」の2つに区別され、この2つを学習者が統括的に自己評価することで成立する。

第3節 音楽科における OPP シートの開発

本節では、中学校音楽科の授業構想を前提とした OPP シートの開発について検討する。検討事項は OPP シートの構成要素である「学習前・後の本質的な問い」「学習履歴欄」「学習全体を通した自己評価」の3点である。

「学習前・後の本質的な問い」は指導内容を反映させたものとした上で、学習者に「受動的な立場から能動的な立場」への変容を促すことができるよう設定する必要があると考えた。また「学習履歴欄」は、複数の項目を設けることで学習者自身が整理しやすくなると推測するため2つ以上の設定を検討した。そして、「学習全体を通した自己評価」では「学習内容」と「自己の変容」の両方に自己評価の視点を置かせるために、「何を振り返ったら良いのか」を明確にした上で、自分自身の変容に焦点が当たるような自己評価欄を設定することとした。

第3章 中学校音楽科における OPP シートを活用した研究授業と分析

本章では、中学校音楽科授業における生徒の学習過程を分析することで、OPP シートの活用と自己評価能力育成の関係について考察する。そのために、生徒の自己評価の過程と OPP シートの機能に着目し、OPP シートを活用した研究授業を計画・実践し、分析を行う。

第 1 節 研究授業の概要

本節では、第 2 章第 3 節で検討した音楽科における OPP シートの開発視点に則り、OPP シートを活用した研究授業の概要について説明する。

第 1 項 研究授業における OPP シートの開発

OPP シートの構成は、第 2 章で検討した先行事例を踏まえ、「単元タイトル」「学習前・後の本質的な問い」「学習履歴」「自己評価」の 4 つとした。資料 1 は本研究授業で使用した OPP シート、また表 4 は OPP シートの構成である。

資料 1：研究授業で使用した OPP シート

《夏の思い出》 学習の記録プリント

8 年 () 組 () 番 名前 ()

A：強弱表現の工夫があることによって、どのような情景が伝わってくるだろうか？（学習前）

B：ふりかえり—授業の最後に書こう—

日付	今日の授業で 1 番大切だと思ったこと	質問や感想など
/ () 限		

C：強弱表現の工夫をすることによって、どのような情景を伝えられるだろうか？（学習後）

D：A～C の自分の考えや授業全体を振り返って、自分自身にどんな変化がありましたか？（自己評価）

MEMO

表 4：研究授業で使用した OPP シートの構成

単元タイトル	《夏の思い出》学習の記録プリント
【A】 学習前の本質的な問い	強弱表現の工夫があることによって、どのような情景が伝わってくるだろうか？
【B】学習履歴	・今日の授業で一番大切だと思ったこと ・質問や感想など
【C】 学習後の本質的な問い	強弱表現の工夫をすることによって、どのような情景を伝えられるだろうか？
【D】自己評価	A～C の自分の考えや授業全体を振り返って、自分自身にどんな変化がありましたか？

第 2 項 授業実践の概要

●指導内容 強弱と歌詞の関わり

[共通事項] 強弱

[指導事項] A 表現 歌唱の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 歌唱表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲にふさわしい歌唱表現を創意工夫すること。

イ（ア）曲想と音楽の構造や歌詞の内容及び曲の背景との関わり

ウ(ア) 創意工夫を生かした表現で歌うために必要な発声、言葉の発音、身体を使い方などの技能

●対象学年 第8学年(中学校第2学年)

●単元名 強弱と歌詞の関わりを意識して《夏の思い出》を歌おう

●教材 江間章子作詞/中田喜直作曲《夏の思い出》

●単元の評価規準

評価の観点	評価規準	具体的学習場面の評価規準
知識・技能	知 《夏の思い出》の曲想と音楽の構造や歌詞の内容及び曲の背景との関わりについて理解している。 技 創意工夫を生かした表現で《夏の思い出》を歌うために必要な発声、言葉の発音、身体を使い方などの技能を身に付け、歌唱で表現している。	① 強弱と歌詞の関わりについて知覚・感受したことを基に、強弱表現の工夫や発声、発音を意識して歌唱することができている。
思考・判断・表現	《夏の思い出》の強弱の特徴を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したことの関わりについて考え、どのように歌唱するかについて思いや意図をもっている。	① 強弱と歌詞の関わりについて知覚・感受したことを基に、歌唱表現の創意工夫について考えている。 ② OPP シートに強弱と歌詞の関わりに対する自分の考えや、自己の変容を表現している。
主体的に学習に取り組む態度	《夏の思い出》の歌詞が表す情景や心情及び曲の表情や味わいに関心をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に歌唱の学習に取り組もうとしている。	① 強弱と歌詞の関わりに関心をもち、他者と協働しながら意欲的に《夏の思い出》を歌唱している。

●指導計画(全3時間)

ステップ	学習活動	時数
経験	《夏の思い出》を歌唱し、強弱と歌詞の関わりの特徴に気づく。	第1時
分析	強弱と歌詞の関わりを知覚・感受し、特定部分の歌唱表現の工夫を考える。	第2時
再経験	歌唱表現の工夫を生かし、聴いている人に伝わるような歌唱表現をグループで深める。	
評価	グループごとに《夏の思い出》の歌唱を記録する。	第3時

本単元は、《夏の思い出》を教材として、歌唱活動や他者との協働的な学びを通して強弱と歌詞の関わりに対する理解や学習者自身の考え方を深めるものである。

第1時では、歌詞に登場する「尾瀬」「水芭蕉」などを資料写真で確認しながら、歌詞に描かれた風景などをイメージし歌唱練習を行う。また、強弱の変化が大きい箇所に着目した上で、学習前の本質的な問い「強弱表現の工夫があることによって、どのような情景が伝わってくるだろうか？」に回答する。第2時では、生徒たち自身が曲中から特に強弱の工夫に取り組みたい部分を選択し、同じ部分を選択した生徒でグループを組み歌唱練習を行う。第2時終了

後には、学習履歴欄の振り返りを記入する。そして第3時では、第2時で工夫した強弱表現が「人に伝わるかどうか」という視点を持って再度歌唱練習を行い、グループごとの歌唱を録画する。授業の最後には、学習後の本質的な問い「強弱表現の工夫をすることによって、どのような情景を伝えられるだろうか？」と自己評価に回答するといった流れになっている。

第2節 研究授業の分析

第1項 研究授業の対象

研究の対象は、京都市内A小中学校第8学年B・C組において、令和6年4月26日～5月15日の期間内に各学級計3時間で行った実践である。OPPシートの記述内容と授業中の生徒の観察内容を照らし合わせ、分析を行う。また、学習前後における変容が表れ、グループ活動にも意欲的に参加していた田中（仮名）を分析対象生徒とした。なお、本研究授業における資料掲載については、実践校において許諾を得て掲載しているものである。

第2項 分析の対象と視点

分析対象は、OPPシートの記述内容と授業中の生徒の観察内容である。OPPシートの記述内容は、「学習前の本質的な問い」「学習履歴」「学習後の本質的な問い」「自己評価」の4項目を時系列に沿って分析する。また、授業中の学習活動における生徒の発言やグループ活動の記録、単元の最後に録画した歌唱映像をOPPシートの記述内容と照らし合わせて分析する。

また、本研究授業の分析視点は「生徒の変容」と「OPPシートの機能」の2点である。

第3項 分析

はじめに、分析対象生徒である田中のOPPシートと記述内容を以下の資料2、表5に示す。

資料2：田中のOPPシート

《夏の思い出》 学習の記録プリント

8年()組 ()番 名前()

A：強弱表現の工夫があることによって、どのような情景が伝わってくるだろうか？（学習前）

歌詞の中にある言葉 → 「水芭蕉の花が咲いている」は特に強いから、水芭蕉、咲いている、すずしやうな情景が

B：ふりかえりー授業の最後に書こうー 差をつけることスゴいよね！ 次はもっと強弱表現していきよう！ 伝わる。

日付	今日の授業で！ 一番大切だったこと	質問や感想など
5/18(水) 上 限	強弱表現にしっかり差をつけること good	他のクラスのものも見てみて、

C：強弱表現の工夫をすることによって、どのような情景を伝えられるだろうか？（学習後）

広い「尾瀬」という空間でのんびりしている、風がふいたり花のにおいがして、する情景が伝えられる。「水芭蕉の花が咲いている」で、いい香りかして気持ちよーいと感じると思う！！

D：A～Cの自分の考えや授業全体を振り返って、自分自身にどんな変化がありましたか？（自己評価）

今回は歌詞が先、後から強弱だったの で、情景、そでってん思いうかべやすかった。前までは強弱と歌詞を結びつけられなかったが、今回はそれができた！！

MEMO

歌詞が先 → 後から強弱などの作曲

表 5：田中の記述内容

	記述のタイミング	記述内容
【A】 学習前の 問い	第1時学習後	歌詞の中にある言葉→「水芭蕉の花が咲いている」は特に強いから、水芭蕉を見ているすずしそうな情景が伝わってくる。
【B】 学習履歴	第2時学習後	強弱表現にしっかり差をつけること
【C】 学習後の 問い	第3時学習後	広い「尾瀬」という空間でのんびりしている。風がふいたり、花のにおいがしたりする情景が伝えられる。「水芭蕉の花が咲いている」でいい香りがして気持ちよいと感じると思う！！
【D】 自己評価	第3時学習後	今回は歌詞が先、後から強弱だったので、情景をたくさん思いうかべやすかった。前までは強弱と歌詞を結びつけられなかったが、今回はそれができた！！

1. 学習前の本質的な問いの分析

学習前の本質的な問い「強弱表現の工夫があることによって、どのような情景が伝わってくるだろうか？」という問いに対し、田中は「歌詞の中にある言葉→『水芭蕉の花が咲いている』は特に強いから、水芭蕉を見ているすずしそうな情景が伝わってくる。」と回答した。

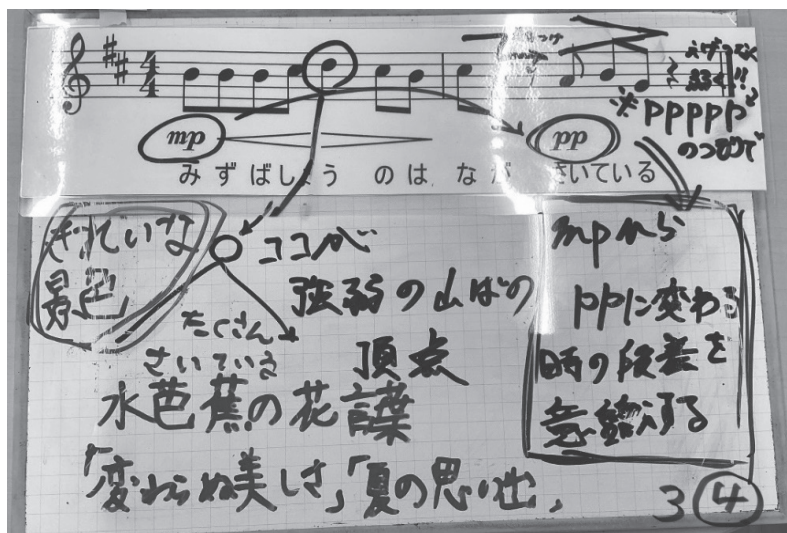
田中は歌詞に描かれた情景に注目し、特定部分の強弱表現にも言及した。この歌詞の部分は授業の中で歌詞を朗読する際に田中が繰り返し練習していた部分である。しかし、「水芭蕉の花が咲いている」という部分は強弱変化が細かく指示されている部分であり、田中が記述しているような「特に強い」部分ではない。そのため、問いに対応する回答を試行錯誤したが、この時点では田中自身が強弱表現の工夫と情景が結びつけることができていなかったと考えられる。また、田中は歌詞や具体的な強弱、情景について記述していることから、学習前の問いに忠実に答えようとしていることが明らかである。そのため、学習前の本質的な問いがあることによって学びの視点が明確化され、田中は学習前の時点から強弱表現に注目しつつ歌詞と結び付けて考えようとしていたと考えられる。

2. 学習履歴の分析

学習履歴における問い「今日の授業で1番大切だと思ったこと」に対し、田中は「強弱表現にしっかり差をつけること」と回答した。

第2時ではグループ活動において強弱表現の工夫に取り組み、田中が属していたグループではホワイトボードに自分たちの考えをまとめながら歌唱練習を行っていた。資料3は、田中が属していたグループの活動記録である。

資料 3：第 2 時におけるグループ活動の記録



歌詞の内容や情景に関わる内容は青字で記述され、具体的な強弱表現の工夫は黒字で書かれている。田中のいるグループは「水芭蕉の花が咲いている」の部分を選択し、歌唱表現の創意工夫に取り組んだ。田中たちは「デクレッシェンド」や「ppppp」など、独自の強弱記号を付け足したり、mp と pp の違いを表現するために「段差を意識する」という具体的な方法を考えたりしていた。またグループ活動では、歌唱と話し合いを繰り返し行い、表現の工夫が歌唱に表れるよう練習を進めていた。

田中は他者と強弱表現について試行錯誤する過程で、pp の部分に「えげつなく弱く！！※ ppppp のつもりで」といった独自の強弱表現を追加し、自分たちが表現したい強弱に近づけるために「mp から pp に変わる時の段差を意識する」といった具体的な意識を持ちながら歌唱練習に取り組んでいた。このことから、前時では「特に強い」と捉えていたフレーズを、楽譜上の強弱記号を他者と協働的に分析した結果、より豊かな強弱表現への理解に繋がったと考えられる。また、「授業の中で 1 番大切だと思ったこと」といった振り返りの視点が明確に提示されていることによって、田中自身がグループ活動の中でこだわった強弱表現の工夫が学習を進展させ、「強弱表現にしっかり差をつけること」と回答したと考えられる。このことから、自らの学びの行為を言語化しつつ、1 時間の学びの成果を凝縮した振り返りを行うことができていると言える。

3. 学習後の本質的な問いの分析

学習後の本質的な問い「強弱表現の工夫をすることによって、どのような情景を伝えられるだろうか？」に対し、田中は「広い『尾瀬』という空間でのんびりしている。風がふいたり、花のにおいがしたりする情景が伝えられる。『水芭蕉の花が咲いている』でいい香りがして気持ちよいくちを感じると思う！！」と回答した。

情景については、歌詞に登場する「尾瀬」の空間だけでなく、「風が吹く」「花のにおいがする」といったように、その場に咲く水芭蕉の花の様子などを映像的に想像していることが分かる。このことから、単元を通じた学習活動によって、最初の「すずしそうな情景」から空間的

なイメージや五感を働かせたイメージへの転換がみられ、創意工夫に取り組んだ部分に対しては「いい香りがして気持ちよいと感じると思う」というように、情景に関する詳細な記述がみられた。学習前の本質的な問いに対する回答と比較すると、教材の捉え方が大きく変化し、学習の成果が明らかとなった。また録画した歌唱映像では、前時のグループ活動において取り組んだ強弱表現の工夫を生かし、強弱に差をつけることを意識した姿がみられた。また、学習後の本質的な問いがあることにより、歌唱における強弱表現の工夫を相手に伝えようという意識が生まれ、田中本人に学習内容の深まりやイメージの転換の自覚を促していることが明らかとなった。

4. 自己評価の分析

自己評価の問い「A～Cの自分の考えや授業全体を振り返って、自分自身にどんな変化がありましたか？」に対し、田中は「今回は歌詞が先、後から強弱だったので、情景をたくさん思いかべやすかった。前までは強弱と歌詞を結びつけられなかったが、今回はそれができた！！！」と回答した。

田中の記述から、歌詞の朗読活動や歌詞に登場する物や言葉について学習したこと、そして、それらの学習の後に強弱表現に学習の視点が置かれるといった学習の流れを的確に理解していることが明らかである。また、田中自身が本単元において強弱と歌詞を結び付けられるようになったという自分自身の変容を自覚していることから、「これまでの自分」と比較して、この単元を通して「何ができるようになったか」を田中自身が分析することができたと考えられる。また、学習前と学習後における強弱と歌詞の関わりに対する意識の変化について記述していることから、田中本人が自身の変容を自覚し、単元を通した自己評価を成立させていると考えられる。

第3節 研究授業の考察

本節では、第2節において分析した結果を整理し、OPPシートを活用した音楽科授業における生徒の変容やOPPシートの機能を明らかにする。また、これらの結果を基に自己評価能力の育成について考察する。

第1項 生徒の変容

研究授業の分析によって明らかになった田中の変容は以下の通りである。

田中は、第1時において歌詞に描かれた情景に注目しながら、強弱が細かく変化する部分を1つのまとまりとして「特に強い」と捉えていた。しかし、第2時で他者と強弱表現について試行錯誤する過程で、自分たちで独自の強弱記号を追加したり、強弱の段差といった強弱表現を工夫するための具体的な声の出し方を意識したりするようになった。さらに第3時では前時の内容を生かし、強弱に段差をつけることを意識した歌唱表現に取り組み、歌詞に描かれた情景についても空間的なイメージや五感を働かせたイメージへと転換した。本単元の最後の自己評価では、強弱表現の工夫と歌詞に描かれた情景を結び付けるようになったことや、単元全体を通した自身の学びを振り返るようになったことを田中自身の言葉で記述できるようになった。

第2項 OPP シートの機能

研究授業の分析によって明らかになった OPP シートの機能として、以下の4点が挙げられる。

第一に、学習者自身にとって学びの視点が明確になるという点である。本単元では学習前の本質的な問いの設定によって、強弱表現の工夫や歌詞に描かれた情景への注目を促す働きがみられた。

第二に、自らの学びの行為を言語化して振り返りを促すという点である。本単元では、学習履歴欄の設定によって、感想や質問のみにとどまらず、「一番大切だと思ったこと」という視点から、学習活動で自分自身が何をどう意識したのかを言語化する機会を与えることができた。

第三に、学習者自身の考えやイメージの転換を自覚させるという点である。本単元では、学習後の本質的な問いの設定によって、歌詞に描かれた情景のイメージ転換の自覚を促すという働きがみられた。

第四に、学習者にとって自身の変容を自覚させるという点である。本単元では、学習後の自己評価の設定によって、学習者自身の変容に焦点を当て、指導内容や単元目標に対する意識の変化を促すという働きがみられた。

第3項 自己評価能力が働いた場面

研究授業の分析によって明らかとなった生徒の変容と OPP シートの機能から、自己評価能力の育成について考察する。

本研究授業において、学習者が自己評価能力を働かせた場面は「1時間ごとの学習状況に対する自己評価」「単元全体の学習成果に対する自己評価」「自己の変容に対する自己評価」の3つである。図3に自己評価能力が働いた場面の関係図を示す。

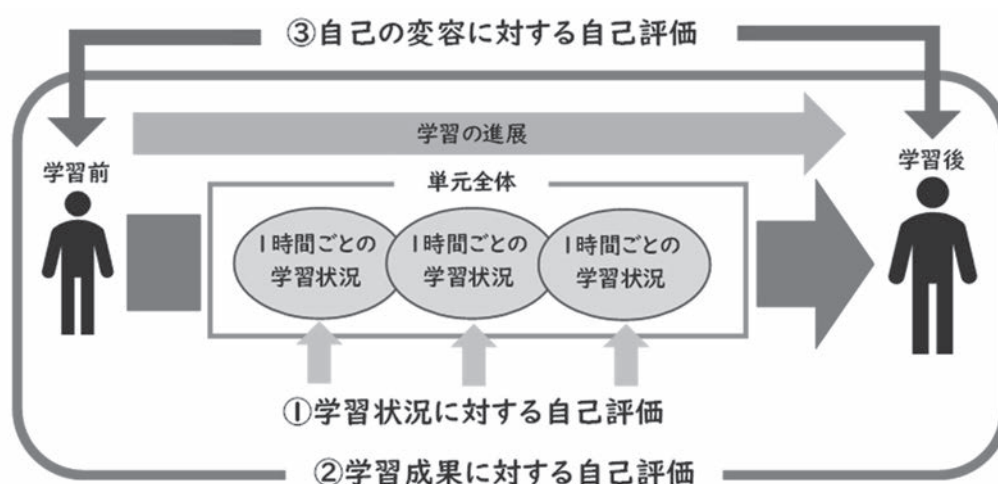


図3：自己評価能力が働いた場面の関係図

① 1時間ごとの学習状況に対する自己評価

学習履歴の問い「今日の授業で一番大切だと思ったこと」に回答する際、学習者は第2時の始まりからグループ活動終了までの自分自身を振り返り、さらに振り返った内容から「大切だと思ったこと」を抽出するといった思考過程を辿る。この過程は、メタ認知を働かせながら自

らの学習状況を自己評価していると言える。

② 単元全体の学習成果に対する自己評価

学習後の本質的な問いに回答する際、学習者は学習前の問いの回答を見返したり、学習履歴の内容を振り返ったりしながら学習後の問いについて考えることが推測できる。つまり、学習者は単元の始まりから学習後までの単元全体を振り返った上で学習後の問いに回答する。この過程は、振り返りから得た情報に基づき、学習者自身が自己の学習の成果を自己評価していると言える。

③ 自己の変容に対する自己評価

自己評価欄に回答する際には、学習内容だけでなく、本単元の学習を通して起きた自分自身の変容について考える必要がある。そのため、学習者は学習前の自分と学習を終えて成長した現在の自分を比較し言語化するといった活動を通して、自己の学習状況を把握し、自己の変容を自己評価していると言える。

単元全体の学習成果に対する自己評価は本質的な問いや学習内容に軸が置かれているのに対し、自己の変容に対する自己評価は「できるようになったこと」「分かるようになったこと」「学習を通して見えてきたこと」など、学習者自身の能力や理解度に軸が置かれているといった相違点がある。

以上のことから、OPP シートの活用によって学習内容や学習成果、学習者自身の変容を随時振り返る場が提供されるため、「1 時間ごとの学習状況に対する自己評価」「単元全体の学習成果に対する自己評価」「自己の変容に対する自己評価」を通して、学習者は学習の様々な場面で自己評価能力を働かせていることが明らかとなった。

終章 結論と考察

第 1 節 結論と考察

第 1 項 本研究の統括

第 1 章では、自己評価に関わる用語の定義を規定し、学校教育における自己評価の位置づけと意義を整理した上で、現在の学校教育における自己評価能力の育成に対する課題を明らかにすることができた。また、第 2 章では自己評価能力の育成に有効だと考えられる OPPA 論の定義と実践方法について明らかにし、OPPA 論を活用した先行事例を検討した上で、中学校音楽科授業における OPP シートを開発するための手がかりを得ることができた。そして、第 3 章では第 1 章と第 2 章で明らかにしたことを基に、OPP シートを活用した研究授業を構想し、生徒の学習過程の分析結果に基づき、音楽科授業における生徒の変容と OPP シートの機能を明らかにし、自己評価能力が働いた場面について考察した。

第 2 項 結論

第 3 章において研究授業を分析した結果、OPP シートを活用した音楽科授業における生徒の変容や OPP シートの機能が明らかとなった。

1. 生徒の変容

本研究授業を通して表れた生徒の変容は以下の通りである。

はじめは歌詞に描かれた情景と強弱表現を関連づける姿はみられなかったが、グループによる歌唱表現活動を通して、独自の強弱記号を追加したり、強弱表現を工夫するための声の出し方を意識したりするようになった。その結果、歌詞と強弱を関連づけて捉え直すようになり、歌詞に描かれた情景についても空間的なイメージや五感を働かせたイメージへと転換し、単元全体の自己評価に繋がるといった変容が明らかとなった。

2. OPP シートの機能

OPP シートの機能として、以下の4点にまとめることができた。

- (1) 学習者にとって学びの視点が明確になること
- (2) 自らの学びの行為を言語化して振り返りを促すこと
- (3) 学習者自身の考えやイメージの転換を自覚させること
- (4) 学習者にとって自己の変容を自覚させること

また本研究授業の分析結果を踏まえ、OPP シートを活用した音楽科授業における自己評価能力の育成について、OPP シートの活用によって学習内容や学習成果、学習者自身の変容を随時振り返る場が提供されるため、「1時間ごとの学習状況に対する自己評価」と学習内容を軸とした「単元全体の学習成果に対する自己評価」、そして学習者自身の能力や理解度を軸とした「自己の変容に対する自己評価」というように、学習者は3つの場面において自己評価能力を働かせたことが明らかとなった。

第3項 考察

最後に、OPP シートの活用によって起こる生徒の変容や OPP シートの機能、そして自己評価能力の育成に着目し、OPP シートを活用した音楽科授業の意義について考察する。

第一の意義として、授業間の接続を円滑にし体系的な学習を実現できる点である。中学校の音楽科は週に1回程度しか授業時数がないため、生徒たちが前時の内容を覚えていなかったり、想定していた学習活動に生徒たちが付いていけなかったりといったことが起こる。しかし、OPP シートに学習履歴として毎時間振り返りを行うことにより、生徒は OPP シートを確認することで前時の内容を思い出すことができ、スムーズに学習へ参加することができると考えられる。

第二の意義として、単元全体を通した学びの視点が明確になる点である。音楽科の学習活動は指導内容を軸に展開されるが、歌唱や器楽の実技や話し合い活動など、短い時間の中で様々な学習活動が展開されるため、常に指導内容を生徒たち提示し続けることは難しい。しかし、OPP シートには指導内容を反映させた「学習前・後の本質的な問い」が設定されるため、学習者が常に指導内容を意識して授業に参加できる環境を整えることが可能となり、その結果、生徒たちは単元全体を通して何を学ぶのかといった明確な見通しを持つことができると考えられる。

第三の意義として、学習に対する自己評価を生かした自己調整学習に繋がる点である。OPP シートには単元全体の学習内容を生徒の技能や思考の変容を中心に表現され、生徒は客観的に自

身の学びの道筋を把握することができる。OPP シートによって単元の学習中においても自身の学びを振り返る場面が設定されることから、技能面の成長や思考の変容に対する振り返りを行う回数が増え、「前時にできるようになったことを生かして今回はさらに上手く歌いたい」「前回上手くできなかったけれど、今回は友達や先生からのアドバイスを生かして違う方法で練習してみよう」というように、生徒自身が学びを調整するための手段になると考えられる。

以上のことから、音楽科授業で OPP シートを活用することで「授業間の接続を円滑にし体系的な学習を実現できること」「単元全体を通した学びの視点が明確になること」「学習に対する自己評価を生かした自己調整学習に繋がること」といった意義があると考えられる。

第 2 節 今後の課題

本研究における課題は「配慮を必要とする生徒への対応」と「他単元における自己評価の深まり方の検証」の 2 点である。

OPP シートを活用することによって単元全体の学習や自己評価の深まりが期待できる一方、OPP シートの性質上、自身の考えを言語化し表現することが苦手な生徒や読み書きに不自由がある生徒にとっては負担が大きい学習活動になってしまう。机間指導を行えたとしても、基本は一斉指導の中の学習活動になるため、十分に配慮することは難しい。そのため、文章以外にも図や絵といった表現方法やタブレット端末を活用した表現方法などを取り入れることで、生徒たちの負担を減らすことができるのではないかと考える。

また、今回は歌唱分野の全 3 時間における研究授業だったため、他単元において OPP シートを活用することができるのかどうか、生徒たちの自己評価を深めることができるのか、といった視点から授業実践を行い検証する必要があると考える。

付記

本研究における資料掲載については、実践校において許諾を得て掲載している。

主な引用・参考文献

川村有美「音楽授業における OPPA の教育的意義」『音楽学習学会紀要』第 13 巻、2017 年、21-30 頁。

田中耕治『よく分かる教育評価[第 3 版]』ミネルヴァ書房、2021 年。

西岡加名恵『理解をもたらすカリキュラム設計―「逆引き設計」の理論と方法』日本標準、2012 年。

西岡加名恵・石井英真『教育評価重要用語事典』明治図書出版、2021 年。

橋本美保『教職用語辞典』一藝社、2019 年。

堀哲夫『一枚ポートフォリオ評価 OPPA 一枚の用紙の可能性』東洋館出版、2019 年。

文部科学省『中学校学習指導要領解説総則編』2017 年。

注

- ¹ 川村有美「音楽授業における OPPA の教育的意義」『音楽学習学会紀要』第 13 巻、2017 年、21-30 頁。
- ² 松尾知明『21 世紀型スキルとは何か—コンピテンシーに基づく教育改革の国際比較』明石書店、2015 年、25-26 頁。
- ³ 国立教育政策研究所「資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究報告書 1～使って育てて 21 世紀を生き抜くための資質・能力～」平成 26 年度プロジェクト研究調査研究報告書、2015 年、7 頁。
- ⁴ 国立教育政策研究所、前掲書、99 頁。
- ⁵ 中島雅子『自己評価による授業改善 OPPA を活用して』東洋館出版社、2019 年、106 頁。
- ⁶ 二宮衆一「学習のための評価」田中耕治『よく分かる教育評価[第 3 版]』ミネルヴァ書房、2021 年、79 頁。
- ⁷ 文部科学省『中学校学習指導要領解説総則編』2017 年、100 頁。
- ⁸ 千田晴久「振り返りシートを活用した社会科の授業—自己評価と学習意欲の関連性—」『神奈川大学心理・教育研究論集』第 44 号、2018 年、235-242 頁。
- ⁹ 二宮衆一「自己調整」西岡加名恵・石井英真『教育評価重要用語事典』明治図書出版、2021 年、134 頁。
- ¹⁰ 木村明憲・黒上晴夫「ICT を活用した自己調整スキルを発揮して学ぶ学習モデルの開発」『日本教育工学会論文誌』第 46 巻、第 3 号、2022 年、527 頁。
- ¹¹ 田山享子「小学校高学年『教科』外国語に向けた自己評価改善の試み—新学習指導要領が育成を目指す資質・能力に基づいて—」『共栄大学研究論集』第 18 号、2020 年、185-199 頁。
- ¹² 遠藤貴広「子どもの自己評価」田中耕治、前掲書、2021 年、72 頁。
- ¹³ 堀哲夫『一枚ポートフォリオ評価 OPPA 一枚の用紙の可能性』東洋館出版社、2019 年、43 頁。
- ¹⁴ 堀哲夫、前掲書、43 頁。
- ¹⁵ 堀哲夫、前掲書、18 頁。
- ¹⁶ 堀哲夫、前掲書、36 頁。
- ¹⁷ 堀哲夫、前掲書、38 頁。